

ちょっと近世・ほんと現代 その1

= 目次 =

\$ 嫌いなもの編

\$ 好きなもの編

\$ 思い出編

\$ 時間編

\$ 伊藤若冲編

嫌いなもの編

「緑。」

緑といえば思い出す絵があります。

兵庫県の北部、但馬にある大乘寺に残る円山応挙の「芭蕉図」。

そのまさに芭蕉の緑です。

緑青といって、銅にできる錆の色で表されているというその緑は、四百年近い時を経ても鮮やかに深く、濃い色です。

芭蕉の葉の隙間から覗いたり、墨でなにやら書き付けたりして戯れる子供は、ふんわりと太って幸せそうで、けれどよく見ると、その笑みは子供のものというよりはすっかり分別の付いた大人のもので、つまりは大人の無邪気さの理想の形が子供の姿をしているようでもあって。

理想の理想、真実の真実を追い求めた応挙先生らしさがとてもよく出ている絵の一つでもあります。

「どこまでが水で。」

もうひとつ、思い出す緑があります。

旅行が大嫌いな大宮は、海外旅行は淡路島や四国を含めてもほとんどしたことはありません。

外国旅行は、たったの一度。しかも、市営プール並に日本人の多いハワイ。

そのハワイのマウイ島、ワイキキビーチのあるところですが、そこにあった動物園の猿山の周囲に巡らされた池が、不自然に着色された緑でした。

そして、そこには「どうしてこの池の水はこんなに汚いの？」と書かれた看板が立っていました。看板は、自分の質問に自分で答えています。

それは、池の底が見えないようにするためです。水に色を付けて底が見えないようにすると、どのくらいの深さがあるのか猿には分からないので、怖がって泳ごうとしたり逃げだそうとしたりしないからです。

その猿山は無人、というか無猿だったので、実際に猿がその水を怖がっているのかどうかは分かりませんでした。確かに、白っぽい緑に濁った水を、覗き込む気にはなれませんでした。

そういう自問自答の看板はあちこちに立っていて、「この動物園で一番歳を取っているのは？」

「小さな黒い牛です。この動物園ができた頃からいるので、もう30歳以上になります。」というのもありました。

そして、「どうしてこんなにこの動物園は緑で一杯なの？」という質問の答えは、たっぷり茂った草の葉に隠れて、見えませんでした。

「実は自然ではなくて。」

緑は自然の代名詞でもあります。ですから、緑を大切に、と言えば自然を大切に、という意味にもなる。

けれども、人間はずいぶん長い間、自然と闘ってきました。台風に吹き飛ばされ地震に潰され日照りに炙られ。

自然さえなければ、人間はもっと幸せだったでしょう。自然と切り離されてさえいれば、人間はもっと安穏と暮らしていけたでしょう。自然に左右さえされなければ、人間はもっと手早く豊かさを手に入れることができたでしょう。

「けれども。」

これは私だけの感覚かもしれませんが、薬は黄色い、というイメージがあります。老いの影に近いとも感じつつ、命を救うもののイメージにも、それが重なるのです。

それは、薬が命を長らえるものであると同時に削るものでもあるからでしょう。ある器官の機能を向上させるためには、他の器官が犠牲になる場合もある。運が悪いと命も落としてしまう。それを副作用、ともいいます。

そして、薬がなければ生きていけないと思っている人、けれど本当は薬なんてなくても生きていける人は、本当は薬がなければ生きていけない人、すぐに医者に見てもらった方がいい人を犠牲にしています。

しょっちゅう医者に行く時間のある人はたっぷり薬を貰え、時間のない人は少しくらい調子が悪くても無理をしてしまう。

時間のある人はたいてい働いていなくて、時間のない人はたいてい働いている。

多すぎる薬は飲みきれなくて、ほとんどを捨ててしまうことになる。その薬を得るために、本当は誰が働いたのか、そんなことを考えもしない人の掌は、きっと真っ黄色に染まっているのでしょう。

「ただひとつ。」

ただひとつ、好ましいと思う黄色があります。

それは、古い絵画の紙の黄色。三百年四百年の時を超えて残ってくれていた絵画の、所々にしみさえもある紙の黄色。

もし、その紙が黄色くなくなっていなかったら、私はそれほど江戸時代の絵画を好きにならなかったでしょう。晒したような白を保ったままだったなら、わざわざ美術館に出掛けてまで見に行ったりはしないでしょう。

紙は、紙の黄色は、自ら愚かな老いを重ねたのではなく、ただそこにあったのです。もともと黄色くなるべきものが、紙だったのです。

紙は、おそらくそれを知っていたのでしょう。

弔いの心は、そこには漂いません。神の内に亡くなった子供は、次に生まれ変わってくるのも早いことでしょう。

けれど、もし望みが叶うことなら、どんなことをしてでも蘆雪は子供の命を取り戻したかったことでしょう。

そして、失うまいとして子供に一日中つきまとう現代の母親への批判も、彼はしやうとしなかったでしょう。

だいたい、学校などというものがある。江戸時代なら関わらなくもいい教師という大人達が、口を開けて待っている。ぶんぶん走り回る車に、ビデオやインターネットやシンナーで頭がしびれた変質者。たいていの病なら薬を飲めば直る、あるいは罹る前に直す体力を手に入れたのに、現代は恐怖で満ちています。

けれど、だからといって、親の恐怖を子供に植え付けて、回りを囲んでしまうことが、果たして子供を育てることになるのでしょうか。

子供の心に闇があるとしたら、それは、マスコミによって肥大化された恐怖におびえる、親の影ではないでしょうか。

いかがでしたか。自分が子供の頃から子供嫌いだっただ宮です。

「写真。」

眼鏡絵、という絵を、円山応挙はよく描いています。遠近法を取り入れた絵のことです。

日本画と呼ばれる絵画の中で、多くの風景は遠近法によっては描かれていません。日本の絵画では、三遠、というものをいかに表現するかか、が課題だったのだそうです。

三遠、すなわち三つの遠さ具合、遠さ加減。山の下から立ち上がるような立体

的立ち上がりを高遠、山の重層感を深遠、近い山から遠い山への広がり和平遠、
というのだそうです。

この考え方はもちろん中国の宋から渡ってきた山水画の影響によるもので、その三遠の思想を骨格としながら視点の浮動性という概念の中に基礎を置くべき、
なんだそうです。

なんのこっちゃ、分かります？ 書いてる私が一番分かりません。私は画家ではないし、美術の専門の勉強をしたこともないので、ここまではほとんど文献の丸写しでした。すみません。

とにかく、西洋と日本の風景画の決定的な違いは、遠近法にある、というのはお分かり頂けると思います。

どこかを遠くにあるように見せたかったら、そこに向かって集中する線を引けばいい。乱暴に言ってしまうと、そういうことなんです。

遠くに行くほどものは小さく見える。道の幅は狭くなっていくように見える。それならば、手前にあるとしたいものは大きく描き、奥にあるとしたいものは小さく描けばいい。それを利用して、実際より町を大きく見せようとわざと道の中心が狭くなっていくように作った町がヨーロッパにあるそうです。

「写真よりも。」

応挙の描いた眼鏡絵の中でも、最も分かりやすく当時の遠近法の形式が現れているのが、京都の知恩院を描いたものです。

それは、少し高いところから見下ろした写真を、丁寧になぞっていったようにも見えます。そしてそれは、写真よりも写真的になってしまいました。

私の手元にある資料では、「真景画」と呼ばれています。それは、もう、画ではない。

もう、とてつもなく安っぽい。江戸時代に間違っ生まれた明治の子供のような、安っぽささえ中途半端な。

「遠慮は。」

安っぽいから不作法なのか、不作法だから安っぽいのか。

写真的な絵画の安っぽさは、目にしみることすらあります。それは写真の不法さを受け継いでいるから。

撮ってあげる、一緒に撮ろう、とさえ言えば、誰でも喜んで応じてくれると思う
こんでいる、無邪気な不作法さが溶け込んでいるから。

私の父は当時としてはかなり高価だったのだろうニコンのカメラで、家族をよく撮りました。旅行先にも、わざわざその重いカメラを担いでいきました。

けれど私は、カメラの前に立たされるのが、嫌で嫌で仕方なかった。もちろん、こっそり撮られるのも好きではありませんでしたが。笑えと言われる、つまり、楽しそうにしている、と言われるのが、わざとらしくて阿呆らしくて、我慢できなかった。

楽しいのなら、ただ単に楽しければそれでいい。楽しかったという証拠を残す必要などない。他人に見せてどうするんだ。ましてや、楽しいふりをする必要など、断じてないのです。

かくして私は、プリクラを二回しか撮ったことのない、珍しい日本人の一人になりました。

参考文献 応挙と呉春 日本の美術 至文堂 鈴木進編

いかがでしたか。嫌いなもののシリーズでした。

好きなもの編

「虫。」

ムシムシ大行進、というテレビ番組をご記憶の方は、もうすぐ40才ですね。

夕方の五時になる直前の数分間に、その番組は稲妻のごとく放映されておりました。ムシムシムシムシムシシー、というテーマソングが始まったかと思ったら、もう終わっているのだから、見逃さないようにするのは至難の業でした。

喧嘩したり餌を採ったり飛んだり跳ねたりしている虫の映像に、適当に台詞をつけたもので、よく登場したのはテントウ虫。赤くて目立つからでしょうか。カブトムシもよく出てきました。

私の住んでいた町には櫟の林より松林が多くて、カブトムシよりもカミキリムシとのつきあいがありました。カブトムシとクワガタ、という組み合わせも、まるで巨人阪神戦のようにしょっちゅう出てきたように思います。

そういえば、交尾をしているところが使われたという記憶がありません。もしあったら、どうなっていたでしょうか。

「立ち姿。」

小川破立(はりつ)、という細工師がいました。螺鈿や蒔絵の技術を生かして、まるで生きているような、というより、生きている虫より生きているらしい虫を、文箱の蓋などに再現した人物です。

金色に光る草の中には、バッタもいます。コオロギも顔を見せています。

けれど一番高いところで、ぐっと立ち上がって例のボクサーポーズを決めているのは、カマキリ。

カマキリは、ご存じの通り肉食です。その食べっぷりは昆虫界でも右に出るものはいないのではないのでしょうか。コオロギの一匹や二匹、あっという間に、ころころ、です。ころころ、となるのは、頭です。

「頂点。」

けれど、やっぱり一番強いのは人間だと、カマキリがコオロギを食べるのを見ながら、思ったのです。カマキリにコオロギを与えたのは、私です。そして、カマキリは籠の中にいます。

私はカマキリがコオロギを食べるのを知っていて、与えたのです。

そういえば、私はテントウム虫もたくさん飼っていて、アブラムシを与えていました。カラスノエンドウ、という、小さな紫の花の咲く柔らかい枝にアブラムシがたっぷり着くのを知っていたので、学校帰りによくお土産にしていました。

紋白蝶も飼いました。紙箱の中に蛹をたくさん入れておき、ぱっと開けると、煙のように蝶が舞いあがりました。

蟬の幼虫の、生きているのを捕まえたこともある。夕飯もろくに食べずに見つめていると、幼虫は羽化しました。けれど、羽がきちんと伸びないうちに乾いてしまっ

羽化には湿気が必要だと知っていながら、家に持って帰ってきてしまったのも、私です。

だから、私は子供に虫と遊ぶことを勧めません。今の子供達には親がいつもくっついているので、虫を触ることは自然と触れ合う良い機会、と親が耳元で囁くでしょう。そこからは、決して罪の意識など生まれてこないからです。

いかがでしたか。私は阪神ファンではないので、巨人阪神戦、にしました。とはいえ巨人ファンでもなく。

私は、実が好きです。植物の実。特に、赤いやつが好きですが、緑のもいいし、黄色いのも捨てがたい。

ビワの実は、十二月に咲いた花から実になるまでに、半年かかります。非常に地味なその花の形は、ビワのお尻のところに残っていて、食べる前にしげしげ眺めずにはいられません。

トマトの花は、花の時からトマトの香りがします。茄子の花は茄子に負けないほど紫が濃くて、まるで風船が膨らむように、その実は毎日膨らみます。

私の住む街には街路樹が多いので、山桃の個性的な柔らかい棘のある赤紫の実が歩道に転がっているのや、ニセアカシアの大きな豆の形の房も、少し見上げ

と見ることができます。

「ともかく。」

伊藤若冲(じゃくちゅう)は、よく野菜を描きました。花も好んだようで、お寺の格子になった天井の一枚一枚が全部違う花の絵、なんていう気の遠くなるような仕事もしています。

そんな彼が描いた実の1つが、葡萄。

葡萄、というと西洋風のイメージがありますが、床の間に飾られる絵のモチーフとして好まれていたようです。確かに、絡み合う蔓、大きくて張りのある葉、ぽこぽこと並ぶ実は、絵描きの心をくすぐるのに十分です。

若冲は、輪郭線を用いずに、その複雑な葡萄を描いています。黒々と太い葡萄の枝を描くときには、墨の濃い薄いで浮かび上がらせています。

私たち、というのはこの場合、主に日本人を指しますが、普通絵を描く時には、まず輪郭を取ろうとします。けれど、西洋の画家は、線を表すのに、どちらかを塗りつぶして、その境目を線にしようとするのだそうです。

なんでそんな面倒くさい、と思います。確かに、この世に完全な線は存在せず、面と面の境目だけが線で、同じく完全な点というものはなく、線と線が交わったところだけが点で、三次元であるところの、つまりどうしたところで立体である画材で線を表そうと思えば、まず二次元であるところの面を表す方が、正確を期するという点では正しいのかもしれない。

ああ、ともかく。

ともかく。若冲が、枝の重なり部分を塗り残したことで表したのを、西洋の画家がどう見るのか、も、ともかく。

私は、実が好きです。

「実り。」

秋も深まり、ゆっくりと木々の葉も色づき始めました。晩夏に続く、実のシーズンがやってまいりました。郵便局の近くの植え込みで咲いていた彼岸花も、もうすぐ実になります。アケビの蔓でかごを編む、という便りも聞かれるようになりました。

秋は、実る時期です。春にほけほけと思いつき、夏に暑さにまかせて突っ走った
とが、そろそろ実り始める頃あいです。

いかがでしたか。久しぶりに、関西でも大きな地震がありました。倒れやすい棚に、割れやすい物を置いたりしていないか、再確認です。

曾我蕭白(そがしょうはく)の描くところの風は、ぐるぐると太く黒く、雨をたっぷりを含んだ雲を呼び、民衆を旱魃から救う、らしいのですが、ついでに家の屋根を飛ばしたり大木をなぎ倒したり大事な牛や馬を転がしたりしそうです。結構、はた迷惑な風です。

画集を見るのが、子供の頃から好きでした。画集には、当然ですが必ず絵がついています。それと同じく、百科事典を読むのも好きだった。オールカラーの、膝に乗せると足がすっかり見えなくなってしまうような、重くて分厚い奴。他にも、私が生まれてすぐに出版されて、内容的にはかなり古かった、けれどもその代わ

「光。」

あまりにも印象的な光を捕らまえて描ききった画家、といえば、オランダのレンブラント。

「夜警」で完成した彼の世界は、石畳に響く靴音まで響いてくるような緊張感。息を詰めていなければ、こちらの息づかいが画の中の人物に知れてしまいそうな。大好きな画の1つです。

で、画集をめくってみました。日本の絵師に、あのような光の使い手がいたかどうか。

ううん。いない。第一、光どころか、影を描くということがほとんどない。影は、どうしてもべったりと重くなります。浮世絵にはふさわしくありませんし、写生画でも邪魔者扱い。

例外としては、佐竹曙山と小田野直武。曙山は秋田藩の藩主、直武は秋田支藩の角館藩士でした。二人とも、平賀源内に銅版画を見せられたのをきっかけに、西洋画の模写に没頭していったのです。

けれど、二人が影を描いたのは、模写したのが西洋画だったから。特に直武の画力には底知れないものがあって、忍ばすの池の手前に薔薇の花瓶を置く、という、まさに東洋と西洋のタイトルマッチのような題材も、見事に描き上げています。

それでもやっぱり、影は西洋の光の中にあり、東洋の影は曖昧に紛れてかすんでいます。

「高いか低い。」

ギリシャに彫刻が多くてエジプトにレリーフが多いのは、ギリシャの影が長く薄いのに対し、エジプトの影が濃く短いからだ、という話を聞いたことがあります。

ギリシャの彫刻を赤道近くで見ると、真っ黒の墨のような影ができてミロのビーナスも因業婆になってしまうとか、エジプトのレリーフを緯度の高いところで見ると、ぼやーっとぼやけてインパクトがなくなって、王の権威すらも薄れてしまうのだ、とか。

光を変えて比較したものを見たわけではないのですが、なるほどなあ、と納得したものです。

「さあどっち。」

けれど、日本の画家が影を描かないのは、緯度のせいではない気がします。
真夏の、つむじの真上から照りつける太陽は熱帯のそれだし、真冬の、長々と
畳に射し込む光は、南極の白夜のそのようでもあるし。

さあ、どっちなのでしょう。

若冲展、行きました。

お昼に近くのお店で頂いた高菜チャーハンも美味しかったし、ご機嫌です。

京都国立博物館。JR京都駅からも近いし、大人830円は、お得っ。

「眼鏡。」

実は私、眼鏡好き。自分で掛けるのが好きなのではありません。眼鏡を掛けている人が好き。眉間に皺なんて寄ってたら、もっと好き。

思えば、中学時代の親友はみんな眼鏡を掛けていました。眼鏡を掛けている人で眼鏡を好きな人というのはほとんどいなくて、「眼鏡を掛けている顔の方が好きだ」と言うの大抵嫌な顔をされるのですが、それでも好き。

特に、金の縁の、あまりレンズの大きくないのが好きです。小さすぎるのもなんですが、大き過ぎてずり落ちて来るといのは頂けません。汚れているのなんてもちろん駄目。宝石できらきらしているのもなんだかなあ。

ぴっと背筋を伸ばして、きちんと顔にあった眼鏡を、いつも綺麗にして掛けている、というのがいい。眼鏡のレンズを透かしては磨き、磨いては透かす、という神経質な仕草がいい。外して、ポケットにぶら下げているのとかも格好いい。お風呂に入ったり着替えたりするとき、そっと外して、慣れない場所だと、目を細めながらきょろきょろ置き場所を探したりするのも、可愛らしい。

「お利口？」

さて、江戸時代。眼鏡が一般に普及し始めるのは、江戸時代も後半になってからのこと。同じ頃に普及し始めるのが、入れ歯です。砂糖が安くなり、お菓子が広く食べられるようになって、虫歯の人がどっと増えたからだとか。

今では眼鏡はお利口の象徴です。たぶん、江戸時代でも豊かさと長命と聡明さの象徴だったことでしょう。けれど入れ歯はなんの象徴だったでしょう。まさか、お饅頭をぱくぱく食べられる金持ちの象徴、ではなかった、でしょうね。

「バロメーター。」

「ゴミは文化のバロメーター」という言葉をご記憶の方も多いと思います。かなり曖昧な言葉です。けれど、その当時はきっと、「ゴミが多ければ多いほど文化的な暮らし」という意味で用いられていたはずですよ。

今ではどうでしょう。文化的で進歩的な国では、ゴミはリサイクルされ最小限に押さえられる、と言う意味で用いられるのならいいのですが、ほとんど聞かれなくなりました。

それと同じく、眼鏡をお利口のバロメーターとするのは、古くさいことなのかも知れません。それに、本当に眼鏡が好きなら、自分も掛けるはずですよものね。

私の視力は0.8ほどですが、掛けようと思えば伊達でもいいわけで。お利口そうなのが好きなら、そう見せたいなら、自分も掛けるのが手っ取り早いわけで。

自分は手入れが面倒そうだし高価だしきっとどこかに忘れそうだから掛けないのに、人に掛けろと言うのは勝手な話です。

でもやっぱり、眼鏡を掛けて、レンズの奥の目をぱちぱちさせて困ったように笑う繊細な人が、私は好きです。

~~~~~

実は、眼鏡の似合う人は、鼻が高くて顎の線がはっきりして、美形なんですよ。でも、それに気づいてないのがいいですけどね。

~~~~~

思い出編

「月。」

長澤蘆雪(ながさわろせつ)の絵の中に、彼の自画像とも伝えられるものがあります。

朧の月に誘われるように、ふらふらと忘我の男。腰に差した竹筒には、さて何が入っているのでしょうか。岩の清水か百薬の長か。

いずれにせよ、月は憧れの対象。雲の陰さえなければ、月があります。白く透き通る光を落として。その光は太陽のように目を射るような強いものではなく、影すらも柔らかい、けれど確かに熱を持っています。

ただ、太陽のようにいつでも丸いものではなく、いつも東の空にあるものではなく、三日月はあっという間に沈んでしまうし、太陽より静かな姿はごく薄い雲にも隠れます。

そんな月の光を、無性に浴びてみたくなるときがあります。そんなときに限って満月までかなり間があったり。天気が悪かったり。

「だから。」

そして、だからこそ月は憧れの対象になりうる。密かに心に留めて、待ちわびることも喜びである憧れ。

そんな憧れを、私も持っていたことがあります。

その人は、私に鉄棒の逆上がりを教えてくれた人でした。

口から先に生まれた私は、運動神経には自信がありませんでした。

かけっこは遅いドッジボールでは当てられまくる。バレーボールではアタックをしたつもりが空振り。

けれど、負けてばかりではどうにも悔しい。

そこで私が着目したのは、自分一人のできる運動でした。痩せぎすだった私は、人と一緒に走ると負けますが、自分の身体を支えるのには、軽い分だけ有利です。

ですから、マット運動や跳び箱はそこそこできました。登り棒は巧かったので、猿だといわれました。けれど、さらなる技術を要する鉄棒では、まず棒に昇るため

の逆上がりができない。

逆上がりさえできれば、校庭で一番高い鉄棒でぐるぐる回することもできる。クラスで一番スポーツのできる友達のように大車輪をして宙返りして着地、するのは無理でも、腹に鉄棒をひきつけておいてくるくる回ることぐらいならできる。

要するに、目立ちたかったのです。

それには逆上がりが、どうしても必要でした。

どちらが言い出したかは覚えていません。けれど、学校帰りに近所の公園の滑り台の下での、二人だけの特訓が始まりました。滑り台の頂点を支える四本の足を、地面と平行に支えている鉄柱が、高さといい太さといい、練習にぴったりだったのです。

一週間以上かかったと思います。その人は、とても辛抱強くつきあってくれました。

そして、私は校庭で一番高い鉄棒に昇って、これみよがしに連続前回りや逆上がりをしてみせる栄光を手に入れることができたのです。

「傷ではなくて。」

その人は、月のように美しい目をしていました。スポーツができて辛抱強く優しいだけでなく、頭も良くて美人だったのです。

彼女の目には、右だったか左だったか忘れましたが、小さな茶色いシミがありました。私は、それが月の湖に浮かぶ枯れ葉のようで、とても好きだったのですが、そんな気の利いた言葉をその頃に思いつくはずもなく、「○○ちゃんの手って、ここんどこに茶色いものがあるねんなあ」と言って、一緒にいた他の友達にぼろぼろに叱られました。

私にとってそれは傷ではなかったのですが、その人にとってはやはり、傷だったのでしょうか。月を眺めると、時々そのことを思い出し、逆上がりのお礼をちゃんと言ったのかどうかを思い出せない自分が、情けなくなります。

~~~~~

いかがでしたか。私は小さい頃、よく友達に叱られました。親よりもたくさん叱られて、今の私があります。

~~~~~

「蕾。」

一番好きな蕾は、何の花の蕾でしょうか。

ハーブティーの中に、バラの蕾を乾燥させたものがあります。花びらがばらばらになっているものよりもかなり高価で、いつも見つめるだけで終わります。

バラは花の王様。花の形も、葉の形も、これぞ花これぞ葉という、造形の集大成のような完全な姿をしています。

私が選ぶのは、そんなバラの蕾ではなく、朝顔の蕾。きれいに畳まれた英国紳士の傘のような蕾は、するすると開いて夏の光を浴びます。

朝寝坊がなにより好きな私にとって、朝顔の開く直前の新鮮な蕾に出会えることは人生の内にそれほどあることではありません。紺の傘紅色の傘水色の傘。ごくごく薄い傘は、すぐに夏の光に縮れて、私が起きるまで待つてなどはくれません。

それなら早起きすればいい、と勤勉な人は言うでしょう。明日の朝に咲きそうな蕾を選んでおいて、薄暗いうちから起き出して見ればいい。早起きは気持ちがいいよ、朝の空気はすがすがしいよ。

けれど、私にとって朝顔の蕾は、朝から雨が降っていて開くのが遅れて昼過ぎにやっと顔を出した太陽にのんびり開くものであってかまわないのです。準備万端整えて、計画通り早寝早起きで見えるものではない。

そんな、努力と精進の上に出会うものでは、ないのです。

「見上げれば。」

だから私は、絵画が好きなのでしょう。ふと目を上げればいつでもそこにある。

伊藤若冲(じゃくちゅう)は、まさか私のような怠け者に合わせたわけではないでしょうが、晩年に暮らした石峯寺の観音堂の天井に、百六十七の花の画を描きました。

ふっと見上げてそこにあるのは、ビヨウヤナギの雄しべです。明るい黄色をして薄い花びらの中心でふわふわと沸き立っている雄しべは、雄の役割をするにしてはとてもなまめかしく、真珠のような花粉が今にもこぼれそうです。

ふっと見上げてそこにあるのは、ブッソウゲの朱色です。ハイビスカスのほうが有名な名前です。やはり雄しべが立派なこの花は、宙を舞うように枝を巡らせています。

「それはどこにでも。」

私は少し前に父親を亡くしたのですが、その父親が連れて行ってくれたところで一番印象に残っているのは、近所のため池に映る月を見に行った時のことでした。あまりにも明るい月の光に誘われて、一家総出で月を眺めに、池の土手を歩いたのでした。

東の月が、ぴったりと水面に張り付けたように移っていました。

季節は秋。けれど播州地方は一年中ぬぼーっ、と暖かい。喉が渴いたのでわざわざ池から家を通り過ぎて一番近くにある喫茶店に行き、一家総出でクリームソーダを飲みました。

私はたぶん、小さな頃はかなりあちこちにつれていって貰った方だったでしょう。キャンプに行ったのも一度や二度ではありませんでしたし、海には毎年行きました。川で泳いだのも、一度や二度ではありません。遊園地にも水族館にも美術館にも芋掘りにも潮干狩りにも温泉にもスケートにも大抵のものは行きました。さすがに海外には行きませんでした。

それでも一番覚えているのは、全部で2時間にもならない、突然決行された月見でした。合成着色料の緑の上に浮かんでいる、氷の混じったアイスクリームでした。

それは、ふと見上げればあるものです。いつもの生活の中に、当たり前顔を
してちょこんと座っているもので、例えば鴨居の上とか、下駄箱の上などに、知ら
ん顔して乗っかっているものです。

そういえば、母方の親戚総出でドライブインの喫茶店でクリームソーダを頼んだ時。黄色いのやピンクのも出てきて、綺麗だったっけ。

「裏。」

障子には裏表はありません。いわば両方とも表です。一方、襖には表がある場合とない場合がある。部屋を仕切るための襖は両面表ですが、押入に使われる襖には裏があります。

裏がある、という言葉は、いい意味では使われません。けれど、きちんとした裏のない襖は役に立たない。開け閉めするたびに布団が引っかかって破れてしまうようでは、カーテンにでもしておいた方がましです。

厚みがあるからこそ、襖は棧にはめ込むこともでき、保温や保湿の役を成すこともできるのです。表と裏に挟まれた空間にこそ、襖の意味があるのです。

「暗闇で。」

襖に遮られた空間、押入は、想像以上に静かです。押入の中には音を吸収するものが多い。布団に毛布にシーツに枕に寝間着。

中が途中で仕切られている場合、下の段に潜り込んで柳行李で背中を冷やしながら考え事をすれば、遮られるのは音だけではありません。押入の木の匂いは、他の匂いをかき消してくれます。暗闇では色もなく、襖の間に挟まれた空気は、温度も伝わりにくくしてくれます。

そして、同じく時間も遮られます。私の中でも確実に経過しているはずの時間は、襖の向こうだけで勝手に流れていき、風邪を引いたふりをしてずる休みした学校の授業も、給食の不味いパンも、いくら掃いても綺麗にならない床も、大嫌いなピアノの練習も、私とは関係ないものになります。

ただ、つるつると冷たい柳行李で後頭部の短い髪をこすりながら、最近見つけた萱ネズミの巣のことなど考えながら、私だけの規則で流れていく時間に、どっぷり浸かります。

「見たい、けど。」

近世の画家は、襖画をよく描きました。襖にも大きいものから小さいものまでいろいろあって、戸袋に使われる小さいものには、枝に止まる雀が描かれました。

その戸袋の襖の裏は。いや、戸袋の中は、どのくらい静かでしょうか。

小さな頃でも多分入ることはできなかっただろう戸袋の中で、小さな頃より遙かに強引に流れていく時間を遮って、しばらく冬眠することは、許されないことなのではないでしょうか。

今日は大寒だそうです。ちゃんと寒いと本当に寒い。なんということでしょうか。

「胡瓜。」

胡瓜には、ちょっと変わった思い出があります。

私の母の実家は鈴鹿山脈の東の端に位置していて、少し車を走らせただけで
秘境に突入することが出来ました。

私が子供の頃、ですから三十年ほど前には比較的珍しかったワゴン車にテントやらお米やらお味噌やらを詰め込んで、いざ出発です。運転するのは叔父、つまり母の弟で、助手席で一番楽しそうなのは私の父、そして私と妹。

叔父は理科の先生で地質学が専門なので、山歩きには慣れています。父は山の中に川をせき止めて造ったプールの中で泳いで大きくなったそうで、つまりは私が最も都会育ちで山に慣れていないわけですが、それでも裏の雑木林に穴を掘って基地を造るくらいのことは経験済みでした。

川にジュースを浸して冷やすことも、大きな西瓜が流れないように石で押さえることも、実は経験済みでした。

火を熾すのも見たことがありました。母の実家は薪で焚くお風呂だったからで、祖父が薪を割るのまで見たことがあるのです。

それでも、やはり都会育ちの私が初めて口にするものもありました。

「でかい。」

それは、大きな胡瓜。片手では持てません。川でよく冷やしたのを半分に折る、のにも力がいりました。

これは瓜かと尋ねると、いいや胡瓜、畑で採ってきたやつやに(採ってきたものだよ、の亀山弁)、という答えが返ってきました。

それは、野生の胡瓜の味でした。人が飼い慣らす以前の、勝手気ままに蔓を巡らせていた頃の。熟す前に狩られてしまうのではなく、種が実るまでさんさんと陽を受け続ける、本物の胡の瓜の味。

「過去」というのは、「昔」と同義語でもあります。

けれども、過去の「か」は「あやまち」、とも読みます。あの人には過去があるのだ、という時、それは決して栄光に満ちたものを指しません。

しかし、よく考えてみると、それは過去という言葉だけに限ったことではないのです。

あの人には雰囲気がある、とよく言います。誉め言葉として使われることが多いですが、その人にあるという、その雰囲気がどういう雰囲気かが、明らかにされているわけではありません。

良いように解釈すれば、その人の持っている雰囲気はとてもいい雰囲気なのだけれども、具体的に説明するのはちょっと難しいし、誤解も招きやすいので、とりあえず雰囲気と言っとう、ということなのでしょう。

それと近いものに、あなたには可能性がある、という言葉があります。

その場合にも、それがどんな可能性なのか明らかにされることはあまりありません。可能性にもいろいろあって、実はどんどん悪くなっていく可能性もいっぱいあるのだけれど、とにかく可能性があるといっておけば、若い者に対して理解を持っていると見られるだろう、それに、どのみち本当に可能性があるがなかろうが、自分はそのころにはこの世にはいない。

それと同じ言葉に、将来性、というのがあります。将来性といえはとても良い言葉に聞こえますが、絶望的な将来だってあり得るわけです。

才能もそうです。良い才能もあれば悪い才能もある。

「役に立つのは。」

伊藤若冲(じゃくちゅう)という画家がいました。京は錦町の大きな青物問屋、枳屋の四代目として生まれ、高価な画材をふんだんに用いて描きただけ描いた画家でした。

けれど、彼の江戸時代としてはかなり長い、今でも男性としてはやや長い85年の生涯の中には、画ばかり描いてられない時期もありました。

まずは40歳で隠居。枳屋の株の奪い合い、つまり会社乗っ取りの陰謀を收拾した後、若冲は家督を弟に譲ります。そして、天明八年の大火。若冲は73歳でし

火事が起こると、今のように消防自動車が駆けつけるわけでもなく、スプリンクラーが回るわけでもなく、運が悪いと火が燃えるに任せるしかないときもありました。

おそらく、若冲は思ったでしょう。自分が弟の代わりに店を続けていたなら。家族も、そう言って責めたかも知れない。兄さんさえ家に残っていてくれたなら、こんなことにはならなかったのに。どうして長男なのに家を顧みもしないで、役にも立たない画ばかり描いているのだ、と。

周りの人々にとって、若冲の絵の才能は厄介なものでしかなかったでしょう。絵が描けることが今ほど過大評価されていなかった江戸時代、青物問屋の長男は青物問屋の主になる才能があり未来があり、可能性があるのが当然だったのです。

だから、私は過去という言葉の方を選びます。他人にとっては過ち、災いではない、昔を。どんな人にも才能があって将来性がある、可能性はある、つまり、人の役に立つしかない、年金を払うしかない、福祉を充実させるしかない未来ではなく、重く暗く、けれど確実に私のものである、過去を。



25

さて。未来というお題にすると予告したのですが、どうにもうまく最初の言葉が浮かんでできません。珍しいことですね。こういう時は、文頭を質問の形にして、会話形式にしつつ話を進めていくのも一つの手です。

というわけで、みなさんは、未来、といえは何を思い浮かべるでしょう。果てしなく広がる空。地平線まで続く草原。いるか飛び交う海。

時間は大抵昼間で、天気もすこぶる良い。雨が降ってたりはしませんね、普通。季節は初夏といったところでしょうか。

そして、そこに現れ出る色彩は。

薄い青。明るい黄色。柔らかいピンク。限りなく白に近い緑。

いわゆる、パールカラーというのが、思い浮かべるにふさわしい色でしょう。間違っても、鈍く光る赤紫だったり、凍り付くような深い青だったり、気の遠くなるようなきつい赤だったりはないでしょう。

「目指すものは。」

けれど、私が未来と聞いて思い浮かべてしまうのは、中心に冷たい青を含んだ氷の色なのです。南極の砂漠は、この世で最も過酷な環境の所だそうです。とんでもなく乾燥している上に気温が低い。動物はもちろん、苔のような植物さえ生えることができません。その砂漠の真ん中に、アザラシがいました。

もちろん、生きてはいません。乾くだけ乾ききり、けれど肉を食べる細菌さえいない環境では腐ることもできず、完璧なフリーズドライ状態になっていました。

彼、たぶん、彼でしょう、雌はそんな無謀なことはしないでしょう、彼の目指したものは、何でしょう。

それはまぎれもなく、未来です。芯がうっすらと不気味に青い、絶望的な白。自分以外の生命のいない、無粋に人間が上空から見下ろすばかりの氷の砂漠の先に、彼は未来を求めたのです。

「だから。」

ごく薄い青のことを、瓶覗き、といいます。ちらりと藍の瓶を覗くばかりで染め

た、夏向けの薄い青は、淡くにじんて美しい。

けれど、涼しげなその色の先に、永遠に凍りついた氷と、それに閉ざされた大地の嘆きを見てしまうのは、私が上空からとはいえ南極の死の砂漠を簡単に目にできてしまう、奢れる現代人だからなのです。

いかがでしたか。どうも私は未来が苦手。未来もの、嫌いだもの。

「時計。」

江戸時代の絵画に時計が出てくるのは、そんなによくあることではありません。私が知る内では、ひとつだけ。鈴木春信の錦絵に、時計はひっそりと置かれています。

時は鐘や鳥や鶏が告げるものでしたし、一刻の長さは季節や時間帯によって、伸びたり縮んだりしました。

ですから、一日を二十四時間に正確に区切ってある時計は、珍しい舶来の飾り物にはなっても、現実の時間を計るのには向いていませんでした。

春信の時計も、時を告げるためにあるのではない。

女性の1人が団扇を手にしてしていますから、季節は夏。池の芦に這い上がるのは、蝸牛でしょうか、いや、蛍のようです。縁側で囁きあう二人の若い女性の、秘密を知っていて知らぬふりに、静かに動いています。

時は二人の上を、ごくごく個人的に流れていきます。

「時。」

時は、時計があるから存在するものではありません。時計がなくても、日は沈み、日は昇ります。

日本では、ついこの間まで、時刻は日の出や日没を基準にして定められていました。日が昇れば働き始め、日が沈めば家に帰って寝る。

灯りが夜のみならず陽の射さないオフィスまで明るく照らし始めてからは、日が昇り沈むことは時間の基準にはなくなりました。明るくても暗くても、朝の8時

は8時。真っ暗で寒くても、かんかん照りで汗が噴き出しても、出勤時間は出勤時間。

夜の暗闇から人を解放するはずだった灯りは、正確に二十四時間を刻む時計と対になって、正確な時間労働を強いるようになりました。

もう、個人的な時間を刻む時計はありません。常に寸分の互いもなく動く世の中に合わせられた時計は、時報に合わせて修正する機能さえ備えていることがあります。見て見ぬ振りをしてくれる、粹な時計など望むべくもない、さっさと起きろとたたき起こす時計、遅刻したら給料が減る時計、何歩歩いたか、何カロリー使ったかまで知っている時計。

もはや時間は、個人のものではなくなったのです。

「でもね。」

けれど、実は人間はそれほど正確ではありません。

一時間働いたからといって、一時間の効率を上げたわけではない。一時間残業したからといって、一時間しっかり働いているわけではない。

春の一時間と冬の一時間は、違うはずです。雨の日と晴れの日も。すべての日の能率が違うはずだし、違うのが当たり前です。

日の光を浴びると、人間の細胞はさて働こう、と活性化するのだそうです。逆に、日暮れの黄色い光を浴びると眠くなる。ということは、日の長い夏は働きやすく、日の短い冬には体は休息に向いているはずです。

それを無視して、暗かろうが明かろうが、とにかく正確に時間分は働く。いや、働いてみせる。

労働時間が正確に計られるようになって、一見能率は上がったかのように見えます。けれどそれは実は逆で、だらだらと長く働いてみせることばかりうまくっていく。

その意味では、時計はまだ個人のものかも知れません。それは、決して春信の錦絵のように優雅でも、あでやかでもなく、こすっからくみみっちいものではありませんが。

私は残業できない性格。明日できる仕事は明日しましょう。

私が思っていたのと、ちょっと違う。

そういえば、夕方についてはたぶん日本一有名なこの句は、宝井其角です。江戸生まれ江戸育ち、ちゃきちゃきです。

夕涼み よくぞ男に 生まれけり

夏は夜。夕方ではなく実は夜なんです、気温や人のざわめきはまだまだ宵の口の、大都会江戸。袖をまくり上げて、よく張った二の腕を見せびらかしつつ、へぼ将棋をうつ若衆たち。

もしや、と思いながら資料をめくってみます。あった。こういうのです。

夕日影 町半に飛ぶ こてふ哉

これも季節は夏、町半は、まちなか、と読みます。ふらふらと下町の長屋の植え込みに迷い込んだ蝶は、本来は昼に飛ぶはずなのに、陽気な江戸っ子に叩き起こされたのでしょうか、ちょっと迷惑そうです。

「思いこみ。」

夕暮れ時は寂しそう。そんな歌もありましたね。斜陽国家、なんて言葉もあるように、暮れていく落ちていく消えていく夕日に、寂しさは付き物。

と、不覚にも、思いこんでいました。

夕陽は、明日の晴天を約束するものです。

朝日よりむしろ、宵っ張りの若者に似合うもの。都会を生きる人々に似合うものの。

そう、私自身、一度も夕日に寂しさを覚えたことがなかったのです。

アニメの題名は、「ハンター×ハンター」です。

伊藤若冲編

「おお似ている。」

五百羅漢を御存じでしょうか。五百いる羅漢様の中に、必ず自分と似た顔があ

る、というものです。

最初から羅漢様は五百いたわけではありません。けれど来世での幸せを求めて仏像や絵画を寄進する人々が増えると、七や十六では、すぐにシリーズが終了してしまいます。

お寺の裏手の山肌などに、それらは苔むして並んでいます。ああ、あれは亡くなったお爺さんに似ている、こっちのは叔母さんの若い時に似てはいないか、などと言合いながら、ゆっくりと散策するための、いうなればアトラクションのようなものです。

動物や怪物に似ている、という話は悪口になってしまいますが、神様である羅漢様に似ているのなら、少々へちゃむくれでも、「有り難い味のある顔」、ということになります。

それに、羅漢様に会いに行くためには、遠出をしなければなりません。といっても、飛行機に乗らなければならない程ではない。ちょっといつもより長く階段を昇ったり、建物の裏手に回ったり。

いつもより長めのお参りが終わったら、近くの茶店で暖かいお茶でも飲みましょう。土産に、名物のつくだ煮でも買って行きますか。そういえば盆栽のいいのが、参道で売っていましたっけ。

自然と、財布の紐も緩みます。

「たかが商売、されど商売。」

一枚の絵画を米に変えて生きていた画家がいました。

相場より安く絵を売り、代金を石工に渡して羅漢を刻ませたのです。大きな八百屋に生まれ、大量に豪華な絵画を残した伊藤若冲(じゃくちゅう)というこの画家は、85歳で亡くなるまで寄進を続けました。

けれど、皆が皆、彼のように信心深かったわけではない。

人の集まるところに市が立つのは、信長の時代から盛んなことです。

江戸時代、京の都の花見の季節。東山で、絵画の展示即売会が開かれたという記録があります。東山新書画展、と銘打たれた即売会に、「方寸五百羅漢図」という絵画を出品したのは、長澤蘆雪(ろせつ)という円山応挙の弟子でした。人気のある題材は大量に描いて描いて、描きまくる。

墨を紙の上半分にさっと佩いて鯨の背中、点々を繋げて蟻の宴会。けれど鯉などを描かせたら師匠の応挙を凌ぐ程の腕を持っていた蘆雪は、その売り上げを寄進するのではなく、さっさと祇園の水に流してしまったそうです。

どちらも、商売。

そして、それは流通が発達し消費者が多数存在し技術者とも接触しやすい大都会であればこそ、成立するものです。

「これは、あれと同じ。」

さて、これは、ポケモンに似てはいませんか。

人気が出れば新しいシリーズが出され、キャラクター商品も出回る。鼠みたい、と言われて怒る人はいても、ピカチュウみたい、と言われるのは、ちょっと嬉しい。フシギダネは美形ではありませんが、ちょっと意地っ張りなところが魅力でもある。151全部知らなくても、どれが好きか、という話で盛り上がることもできる。

そしてどのキャラクターも、決して下品であったり卑劣であったり凶悪であったりはしない。そういう彼等を好む人々は、きっと人生を肯定的に見ることができるの
でしょうね。

いかがでしたか。ちなみに私はキャタピーが好き。

「ぎっしり。」

ぎっしり詰めてもいいのは冷凍庫、あまり詰めては冷えにくくなってしまうのは冷蔵庫です。

けれどどういわけだか、それは逆転してしまいます。冷凍庫では、バターやスープの素にうどん、そしてどうしてだかいつもあるのが生姜、ドライイーストなんてものであって、とにかくよく凍った食品がころころとまばらです。

対照的に、冷蔵庫では、瓶が可愛いからと買ってきたドレッシング、半分のレモン、丸ごとキャベツ、缶入りのがらスープなんかが蓄積して、中身はそれほどでもないのに総合的に体積的に幅を利かせています。

特に、夏。冷凍庫にはアイスクリームやシャーベットのための空席が確保されなければなりません。氷もよく使うし、第一、暑いのであまり料理する気も起こらず、冷凍保存するほど料理が残らない。冬なら買い置きしておく冷凍物も、持って帰る間に解けそうだし、それに買い物するのも面倒くさい。

でも、西瓜は食べたい。ゼリーも冷やしておきたい。当然ビールも。ワインだって入れておきたいし、トマトやキュウリだって食べたい。

かくして、冷凍庫には冷凍の枝豆の他にはお菓子ばかりになって、冷蔵庫には何やらかにやら冷たいままで食べられるものが貯まっています。

「それで安心。」

ぎっしりつまった冷蔵庫の中を見て、それだけでお腹がいっぱいになることがあります。ああまだこれだけ残っている、と安心するのです。

けれどもし、いっぱいつまっているのが、例えばキャベツだけだったら。例えばそばつゆだけだったら。例えば豚のバラ肉だけだったら。

それは途端に不安に変わります。私は一生キャベツしか食べられないのか。バラ肉だけでは生きていけない。そばつゆなんて辛すぎて、毎日は飲めない。

ドアポケットに牛乳があり、野菜室にピーマンがあり、きちんと蓋をしたマーガリンがあってこそ、私たちは安らぎを覚えます。バラ肉をさっと炒めた中にキャベツを入れて、そばつゆで味付けしてみようかな。想像力も沸いてきます。

ぎっしりの中には、いろいろなものが詰め込まれています。それは同じ種類であったり異なる種族であったりはしますが、ぎっしりが持つ、あふれるような豊かさが、いつもそこにはあります。

ぎっしりな絵を好んで描いたのは、伊藤若冲(いとう・じゃくちゅう)。

彼は、特に鳥を好みました。それも、羽の柄が複雑で美しい、鳳凰や鸚鵡に鴛鴦。一般には地味なイメージである鶏も、若冲が描くと画面にぎっしり。

羽と頭とが絡み合い解け合い、何羽いるのか数えているうちに、目眩がしてきます。

鳳凰の絵も、一筋縄ではいきません。真っ白な羽の一枚一枚の一筋一筋が、一つのごまかしもなく精巧に描かれ、しかも立体感を出しているのは下地の透け具合。

「ぎっしり・その2。」

京都の寂光院が、放火によって全焼しました。

墨になってしまった本尊の中から、夥しい数の胎内仏や文書が出てきました。濡れたり湿気たりしただけで、全て無事だったそうです。

新聞の写真は、箱にぎっしりと詰まった小さな仏の、丸い横長の頭と肩を写していました。少し黒くなっているものもありますが、ほとんどが作られた当時の色をよく残しているようです。

青緑色の衣が見えます。手には錫を携えているようです。お地蔵さんがよく持っている、先に金の輪のついた杖です。赤く見えるのは袈裟でしょうか。

けれど、写真というのは、どうにももどかしい。平家の人々の魂を供養するために作られたという地蔵菩薩は、いったいどんな表情をしているのか。

源氏に滅ぼされ無念の内に命を落とした人々のみならず、地獄に堕ちた人々の魂まで救うという地蔵菩薩は、どんな顔をしているのでしょうか。

「こんな顔？」

ちょっと窮屈そうなお地蔵様達の写真を見ながら私が思いだしたのは、時代は全く違いますが、伊藤若冲(じゃくちゅう)の描いた人形の画でした。

若冲は江戸時代の画家ですから、ざっと600年ほど時代はずれます。いいくに造ろう鎌倉幕府ですから、私たちが江戸時代を見るよりも離れているわけです。

それでも私が思いだしたのは、頭の形があまりに似ていたからでした。いや、たぶん、上から見たらこんな形だろうな、と思うのです。

若冲が描いた人形は、「伏見人形」。正面を向いて、全身を見せています。

というより、正面だけを見せています。そして、緑と海老茶、あるいは青と海老茶、または青と緑と海老茶という、強烈なコントラストの衣を着て、黒い軍配団扇を持っています。軍配団扇というのは、大相撲の行司が持っている、瓢箪型の扇のことです。

そんな派手な出で立ちの人形の正体は、布袋なのだそうです。なるほど、丸いのは頭だけではなくて、お腹もぽってり丸い。乳首が唇と同じ朱色で、なんとも

横長に丸い人形の顔は、平和な時代の人々に好まれるものらしく、すっきりと細い目元に、たっぷりした唇をしています。

それは、人形は、やはり人形であるからでしょう。

けれど、江戸時代も、源平の頃よりは少しはましとはいえ、現代に比べれば子供の死亡率も高かったはずです。

「それだけじゃない。」

人は、自分と同じ姿をしたものを、どうしても作り上げたいらしい。材料は紙であったり土であったり木であったり、今ならセル画であったりコンピューターのデータであったりします。

だから、その時に最もふさわしい、最も美しいものを生み出せる技術で、自分を救うための人形を生み出し、これからも生み出し続けていくのでしょう。

いかがでしたか。人形は苦手。動物のぬいぐるみまでです。

「腹。」

魚の腹を見るのは、なかなか難しい。

泳いでいる魚の腹を見ようとするなら、すぐそばまで泳いでいき、真下に潜り込んで素早く見上げなければなりません。素潜りなら追いつくのもともかく、水の中で上を見上げるのは、肺呼吸の我々には至難の業です。

最近では水中カメラマンの腕もカメラそのものも発達して、大量に泳ぐ魚の腹を、滴も濡れずに眺めることができます。青い魚の水色の腹、赤い魚の桃色の腹。そういえば、蛸や烏賊の腹は。内臓が入っている部分を腹だとするなら、連中の腹は頭に見える、あの部分。

けれど蛸も烏賊も、あんなくにかくにやの癖して、やっぱり泳ぐのは異常に早い。泳ぐというより飛んでいく。かくして、肉眼で彼らの腹をじっくりと観察するためには、彼らの方に陸に上がってもらうよりない。

「ごろごろ。」

伊藤若冲(じゃくちゅう)は八百屋の長男で、野菜の画もよく描きましたが魚の画もよくしました。それは、原色の百科事典のような、右斜め上から左斜め下に泳ぐ、様々な魚の群。いや、泳ぐと言うより、雪崩落ちている魚魚魚。

その中でも腹を見せているのは、蛸と烏賊のみです。烏賊は何を食べたのやら膨らんだ腹でてろんと広がっています。蛸は五本目か七本目か、あるいは一本目か二本目の足の先にくるくると小蛸を絡ませて、堂々と流れていきます。

他の魚は、皆横を向いています。腹は白く、けれども丸ごとこちらに向いている、ということはありません。

それは、彼らがみな生きていない魚だから。京都錦小路で見ることのできる魚が、生きているはずありません。

けれど、若冲とおそらく交流のあったであろう葛蛇玉(かつじゃぎょく)は、生きた鯉の腹をはっきりと描いています。

薄氷を突き破って跳ね上がる、黒々とした鯉。頭が下になっているのは彼が宙返りを試みているからです。

実は、私はこの絵を「いよっ!」と勝手に名付けています。胸鰭と尾鰭は蝶のようにいっぱい開かれ、尾鰭も反り返っている。氷に激突しないよう、目はしっかりと

水面を捕らえている。おそらく、バランスを取るために、鳥のように鰭をぴちぴち波打たせていることでしょう。

けれどそれは、ほんの一瞬の出来事。見る間に鯉は水中にご帰還。ああ気持ちよかった。何喰わぬ顔で、ねぐらに帰っていきます。

いや、もしかしたら、太鼓持ちの泥鰌やひねくれ者の鯰に拍手喝采を浴びているのかも知れません。

「本物は。」

だからといって、鯉の動きを捕らえた蛇玉の方が素晴らしい、などと言うつもりは、毛頭ありません。若冲は、命のない魚の姿を、命のない、いや、かつて命のあったものとして描きました。蛸や烏賊が元気そうに見えるのは、彼らがすこぶる生命力が強いからでしょう。

それは彼の誠実さだと、私は思うのです。まるで生きて泳いでいるかのように、描かなかった。生きているふりは、させなかった。

決して動くことのない画の中の、すでに息絶えている彼らの姿に、私は強くわき上がる生命力を感じます。無理矢理動かしているのではない、音声技術大道具によってたかって存在感を醸し出そうとしているのではない、静かで控えめな、けれど確固たる生命力を。



若冲展、盛況だったそうですね。





ちょっと近世・ほんと現代 その1 vol.2
2019年12月31日

著者 大宮ししょう
発行所 Paper*Back*Factory

メインサイト ちょっと近世・ほんと現代
(URLは著者セントラルに記載)

From PDF : Quartz PDF Context

© Shishow Ohmiya 2019